

河清元年（562）銘像考

- 「弥勒破坐」の解釈をめぐって -

徐 男英（京都大学大学院）

河北省正定県文物保管所蔵の河清元年(562)銘像（以下、本像）は、光背を挟んで前面には宣字座上に二軀の遊戯坐像、背面には二軀の半跏思惟像が表された白大理石像である。光背の周囲には華麗な透彫りが施され、前面上部には双樹が茂って宝塔や何体もの飛天が下降する様子が表される。また宣字座の周囲及び基壇部には、脇侍菩薩、二比丘、力士、獅子、本尊に奉仕する八人の童子形が配される。

本像は台座に造像銘記を伴っており、「河清元年八月廿日」という具体的な制作年、また「造白玉弥勒破坐像一軀」という尊格などの由緒が知られ、弥勒の坐勢に関わる問題を解明する上で重要な作例であるといえる。しかしながら、本像に関する研究は、これまで1978年の発掘に際して出された程紀中氏による考古学的な報告書（『考古』1980年3期）、当該報告書に対して提出された韓偉氏の簡略な意見（『考古』1981年3期）に留まっており、一般への公開も、近年開かれた展覧会の図録（『中国美の十字路展』、2005年、MIHO MUSEUM）などで簡単に触られている程度である。

発表者は、2007年の展覧会の際に本像を実見することが出来た。本発表では、これを踏まえて本像に関する諸問題に再検討を加えたい。具体的に取り上げるのは次の二点である。

第一点は、銘文中にみられる「破坐」と遊戯坐像の尊名との関わりについてである。「破坐」については、これまで先行研究において「𡗗」（韓偉、1981年）、「仏」（謝振發、2006年）、透彫（程紀中、1980年）といった解釈が提出されている。しかし、本発表では『毛詩注疏』（唐、孔穎達疏）などにみられる用例の検討から、「破坐」を「坐をくずす」と解釈し、銘文中の「弥勒」を像正面の双遊戯坐如来像に比定する。更に、本像の「双遊戯坐弥勒如来像」という独特な構図が、敦煌石窟莫高窟259窟西壁正龕の二仏並坐像やギメ美術館蔵の北魏熙平三年(518)銘像といった、遊戯坐を取る釈迦・多宝の二仏並坐像の制作伝統の中で制作されたことを指摘したい。

また第二に、本像の形式的特徴、特に光背の周囲の透彫りに注目する。二仏並坐像、双半跏思惟像、双菩薩立像が北朝期河北地方に多くみられることは既に指摘されており、同様の形式を取る本像も漠然と河北地方像としての理解がなされてきた。しかし、本発表では、曲陽など河北地方の他地域の出土像と本像とを比較検討することで、双樹光背に繊細な透彫りを施すという本像の表現技法が、北朝期河北地方のなかでも臨漳県出土像など南方に限られ、この点により具体的な地域様式を見出し得ることを指摘したい。

以上、本発表では、河清元年(562)銘像を、北朝期末、弥勒像の姿勢が多様化する傾向の中で制作された作例として位置付ける。また、精緻な透彫り光背の彫刻技法にも河北地方の南部の地域的特性が見出されることと併せ、本像にみられる「遊戯坐弥勒像」という特異な弥勒像の形式もまた藁城地域の地域的特性を示すものとして理解したい。